

第4回特色ある県立高校づくり懇談会

議事録

高校教育課

【事務局：今井高校改革推進役】

それでは、定刻となりましたので、ただいまから第4回特色ある県立高校づくり懇談会を開催いたします。会議の進行を務めます、長野県教育委員会高校教育課高校改革推進役の今井でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

開会にあたりまして、長野県教育委員会の内堀教育長から挨拶を申し上げます。

【内堀教育長】

皆さんこんにちは。まず冒頭に年明け早々、能登半島地震、大きな火災、大きな事故などが相次ぎました。亡くなられた方々に心よりお悔やみを申し上げますとともに被害に遭われた皆様にお見舞いを申し上げます。

さて、第4回の特徴ある県立高校づくり懇談会を開催いたしましたところ、御多忙中にも関わらず、ご参加をいただきまして誠にありがとうございます。

今回のテーマは前回に引き続き、「県立高校の特色化・魅力化について」をお願いしたいと考えております。前回は、県境にある高校のあり方などを中心に総括的かつ幅広くご議論をいただきましたが、今回はお手元の資料に、特色化のイメージを示しておりますので、それに基づきまして、具体的なご議論をいただければありがたいと思っております。

1月3日放送の「マツコの知らない世界」ですけれども、赤荻構成員がご出演をされておまして、この懇談会についても触れていただきありがとうございます。

全国的にも注目が高まっている懇談会と思っておりますので、残り2回を残すのみになりましたが、皆さんには言い残しがないように、ぜひ活発なご発言を頂戴することをお願い申し上げまして、挨拶といたします。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

【事務局：今井高校改革推進役】

次に、出欠状況のご報告をします。信州大学の荒井准教授、KOA株式会社の向山取締役会長、株式会社ナイアンティックの野村クリエイティブディレクター、松本市教育委員会の伊佐治教育長は欠席となります。また、一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォームの岩本代表理事は、オンラインでの参加ということで、まだお入りいただいておりませんが、おいおい入っていただけることと思っております。なお、石坂構成員も間もなく参加する予定ということでよろしくお願いいたします。本日のオブザーバーとして阿部知事にもご出席をいただいております。

意見交換に入る前に本懇談会の公開について説明をいたします。毎回の説明となって恐縮でございますけれども、本懇談会につきましては、会議を公開で行いますとともに、会議資料及び議

事録、撮影した写真等について県のホームページ等へ掲載し、希望する構成員の皆様へ写真を提供いたしますのでご承知おきをお願いいたします。

また、懇談会の模様をライブ配信いたしますとともに、議事録を作成するために録音をいたします。併せてご承知おきいただきますようお願いいたします。

次にお配りいたしました資料の確認をお願いいたします。お配りしました資料は、次第、第4回目配布資料、村松座長提出資料の3点でございます。ご確認をお願いいたします。

それでは、会議事項に入ります。進行は本懇談会座長の信州大学の村松教授にお願いをいたします。

【村松座長】

よろしく申し上げます。先ほど、内堀教育長のご挨拶の中でお話がありましたが、赤荻様の番組を私も拝見いたしまして、長野県はイケイケのようでございますので、本日もイケイケの議論が展開できればと思います。最初に事務局の方から資料のご説明をお願いできますでしょうか。よろしく申し上げます。

【事務局：小林高校改革推進担当企画幹】

「第4回目配布資料」、「村松座長提出資料」に基づき説明

【村松座長】

はい、ありがとうございました。

市町村それから市町村教育委員会の方の多様な声。アンケートありがとうございました。

だいぶこれはまた議論の参考にもなるかと思えます。ただいまご説明いただきました資料につきまして、何かご質問等ございますでしょうか。

それでは 早速に意見交換に入らせていただきたいと思えます。

先ほど冒頭でもお話いただいたように、もうこの会議も折り返し残り、今日入れて2回となりました。

私の方もちょっと確認させていただいたところ、この会議で何らかの明確な結論的なものを出すというよりは、いろいろな多様な視点のいろんな声を上げていただき、それをもとに、その後具体的な検討を進めるというそんな方向でありました。そういった観点からですね、ぜひ自由にいろんなご意見いただければと思います。

本日用意されてる項目も非常に多々ございますので、ちょっと各項目十分深めきれないかもしれませんが、ぜひ活発にご意見をお願いいたします。

いただきましたテーマとして2点ですね、選択肢を拡大させるためには何が必要であるかということ、それから県境校や中山間地校の存続にはどんな特色が必要か、この辺を軸に進めていければと思います。

まず冒頭に、前回資料お願いしておきましたの再編基準ですね。先ほど54、55ページでご説明もありました。前回の議論もまとめられているところがございますけども、この基準につきましてご意見ご質問等はございますでしょうか。もしありましたらお願いできればと思いますが、いかがでしょうか。

前回私がこれをお願いした経緯も踏まえまして、私の方から個人的な拝見したときの思いとしまして、やはり現在この少子化ですね、これがもう都道府県というよりも、もう国の想定以上に急速に進んでいる中で、この基準を立てるときに相当非常にもう綿密に様々な角度からご議論されたと思うんですけども、状況もまたあの非常に変わってきているなんていうふうに感じています。この基準がこのままで今の想定以上に進んでいる少子化の中でこの形で本当にいいのかっていうのは一旦検討する余地があるんじゃないかなというふうに思います。

特に県境校につきましては、前回議論いただいた中でも岩本様からもいただいてましたけれども、この単独の学校でっていうだけじゃなくて小規模になっている学校をグループでやったらどうかとかですね、そこで相互に単位互換をすとか、それぞれの特色ある授業を相互に受けられるようにすとか、また規模やサイズだけではない新しい考え方みたいなのも検討の余地があるのかなと思いました。

また、ぜひ、この辺の基準については、状況も踏まえまして、これまでの形でいいのか、それとも見直しが必要なのか等もですね、ご検討いただければというふうには思っておりますが、関連したところいかがでしょうか。

はい、岩本様よろしく申し上げます。

【岩本構成員】

今こちらのオンラインの声は大丈夫でしょうか。はい。

本当一言だけ。再編の基準もしくは望ましい規模というところに関していうと村松先生おっしゃったとおり、生徒を主語にして考えたときには望ましい規模というと、高校生の中には30人とか少人数が望ましい規模という方々も実際いますし、結局大人の基準での望ましさと、高校生を主語に考えたときにも、規模というのは一律にこれが望ましいと言えないのが、国の議論の中にも出てきています。

改めて規模の考え方というのは、もう一度時代に合わせて、もしくは地域の現状に合わせて検討し直すというのはありえるのではないかと私自身も思います。以上です。

【村松座長】

ありがとうございます。

関連したところでいかがでしょうか。基準についてはよろしいでしょうか。

その他どうでしょうか。前回県境校についていろいろ議論をさせていただきましたけども、追加でもう少しこういう観点もあるんじゃないか、こういう点も考えたらどうかというようなご意見等ありましたら、いかがでしょうか。

【阿部知事】

規模の話、基準についての話でいいですか。

冒頭座長の方からいろんな意見を出せばっていう話で、それはそれでいいんですけど。とはいえ一方通行で話をするだけでは何も議論が深まらないので、少しちょっと教育委員会としての考え方を示してもらわないと、私も設置費用を出す立場からして、今の意見をただ聞きっぱなしにするのはいかがなものかというふうに思います。

私の問題意識は、予算を司っている立場でありますので実際学校の規模をどれぐらいにするとか、教員の方をどうするかというのはかなり予算に直接響いてくるんで、非常に慎重に考えなきゃいけないテーマだというふうに思っています。ただその一方、この場でご議論いただいているようにそもそも学校単体で捉えてですね、規模を論じるみたいな形で本当にいいのかどうか、あるいはもっとオンライン使えば、学校という箱にこだわらずに学習することはいくらでもできるようになってきてますので、そういう今お話したように新しい時代変化も踏まえて、学校のあり方っていうのは、私は考えるべきだと思っています。

高校再編を今やってますけど、高校再編やったときに一体何年間、高校再編あるいは今この基準で持つのかっていうのは、私としては非常に関心を持っているところでありますし、これちょっと教育委員会でしっかりと議論すべきところだと思っておりますが、今の考え方について、教育委員会が何もコメントしないのは、私はいかがかと思うので、ちょっと何かこの基準についての経緯とか考え方とか、今出てる意見についてどう考えるのかをちょっと教育委員会として話をしてもらう必要があると思っておりますけど。

【村松座長】

内堀教育長よろしいでしょうか。

【内堀教育長】

資料の54ページ、55ページのところをもう少し説明をさせていただきますと、現在進めている再編・整備、それから学びのあり方とを一体的にやっていきたいというのが今回の高校改革の方針なのですが、そのうちの再編の基準の部分ですね、その部分については、第1期の時には都市部の学校というのがほとんど議論の俎上に載らなかったのですね。ところが、それから十数年経過することによって都市部の高校も縮小化していくというような状況があり、再編の対象となり得るということで都市部と地域というような分け方をして再編基準を作ったところですが、その根本にある考え方というのは、都市部もそれから地域もどちらもそこにある学校を可能な限り残したいという発想なのですね、できるだけ残していくと。だけれども、一定規模以下になってしまうと様々な教育活動に支障が出てくるので、そういう場合には再編をせざるを得ないと。ただ、もう一方で積極的に統合を進めて、大きな学校として作った方が長期的に持続する可能性も高いというような、そういったことを総合的に勘案して作ったものであります。

ですので、一番大事なことは将来を見通して、できるだけ県内にある高校4地区ごとに様々な種類の学校を同程度に配置できるようにして、子供たちの学びの保障をしながら、一方で、できるだけ長く各学校が存続できるようにと、そういう考え方ですので、その中心的な議論、中心的な理念がぶれてしまうと、全然考え方を変えたのですねって話になってしまうと思うのですけれども、今申し上げたように、何を目的としてやっているのかというところが大事なので、それがぶれない形で違う考え方によって、この再編の基準っていうのを見直すことはあり得るかもしれないなというように考えています。

ただ一方で、今回再編統合を進めていく中でこういう基準がありますので、こういう基準に該当した場合は学校がなくなってしまうよという、そういう説明をしながら再編統合を進めてきたという経緯もありますので、その整合性をどうとるかという課題も一つあり、結構難しい状況にあって、いま村松先生や岩本構成員がおっしゃったように、今回のこの議論も実施方針を定めてから5年が経過していて、世の中が大きく変わっていく中で、このまま進めていくってことが、本当に妥当性があるのかっていうことで設置した特色ある県立高校づくり懇談会ですので、そういった意味では基準も必要に応じて見直す必要があるのかもしれないと。ただ一方で、これまで進めてきたものとどうやって整合性を取るかという課題はあるかなというのが私の考えであります。

【村松座長】

はい、ありがとうございます。非常に、これまでの経過等も含めまして、難しい部分があるというのも非常によく理解できたかと思えます。関連したところで何か委員の皆様からご意見等ございますか。それでは安原さんお願いします。

【安原構成員】

前日も私も再編について、県境のところを残すべきではないかとは言ったのですが、やはり根本にあるのは公立の倍率が下がっている。この状態が問題だと思うのですね。これが致し方がないことになってしまえば、どんどん人気がない高校が出てくる。そうすると、なし崩し的に再編をせざるを得ないっていうのはあると思いますので、やはり高校の魅力化ということで、この会議が始まったと思います。倍率が非常に低くなって私立に流れていると、少子化もそれに拍車をかけていると。その状況をどうするかをやはり議論した方がいいかなと思います。

【村松座長】

ありがとうございます。今の倍率の話ですが、全国募集とかこういったところもちょっと関係してくるかと思えますので、この辺のお話も含めましていかがでしょうか。この全国募集ですね、この辺のところですね。メリットと同時に全国との比較ですとかそのメリット、そして導入にあたっての課題等もですね、10ページですかね、お示しいただいているところですけども、倍率問題等も含めましていかがでしょうか。はい、堀井様、お願いいたします。

【堀井構成員】

はい、ありがとうございます。実際私も、10月1日時点の年齢別人口表をもう1回見直してみたのですが、10年後には3,800人ぐらい高1の人口が減るってことは、もう20校ぐらいは今の基準でいうと多分なくなっちゃうだろうと思うのですね。

一方で、全国的に減るので全国募集をしても、しちゃいけないって言っているわけじゃなくて、生徒の奪い合いをして、他のところが減ってしまうということも果たしていいのかっていうのを考えて、というよりは、長野県のこの学校が魅力的だから、だから他の県からも来れますよという視点の方がいいのかなとまず一つ思っているのと、もう1個は私立と公立なのですが、もう現時点で私立に流れるっていう感覚よりも、私立と公立と合わせて一緒に考えていく方がいいのかなって。財源の問題、特色ももちろんそうですけれども、もちろん、それから地域のことも併せて考えるのがやっぱり公立だと私は思っておりますが、それも私立と一緒に考えた方がいいのかなと。

場合によっては、その公立の学校の運営というものをもうちょっと柔軟に、例えば民間の私立、今まで学校を運営してきた人たちも公立の運営に関わるような、なかなか難しいかと思えますけれども、例えば公設民営も含めて考えた方がいいのかなと。どうしてもちょっと奪い合いっていうのが、もう、今の人口減少から考えると現実的ではないなっていうように思いました。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。今のその奪い合いというこの方向をちょっと危惧いただいたと思えますし、本当に大事な視点かと思えます。また今、後半の方でいただきました公立と私立のですね、いわば連携っていうのですかね、これっていうのも非常に、今後やはり考えなくちゃいけない。

今回は県立高校のことが中心のかと思うのですが、これ高等教育でも、もう大学の方でもその影響というのは非常に出てきて、我々国公立でございますけれども、私学さんを含めてですね、まさに今のような奪い合いみたいなどころでは、もう先がないのですね。それをどうやって連携して共にやっていくのかという、もう何かそういうフェーズに入ってきているのかなと私も今のお話を聞いていて思いました。それが大学のみならず、高校、そして小中、そういうところまで含めてちょっと考えなくちゃいけないっていうようなことでしょうかね。ありがとうございました。

関連したところでも結構です。いかがでしょうか。順次ご意見いただければと思いますが、どうでしょうか。はい、小木曾様、お願いします。

【小木曾構成員】

坂城高校の小木曾です。全国募集というより、今の話の流れを受けてなのですが、後でまたポイントになってくる県境校とか中山間地校の存続についてのところでも、また少しお話でき

ればとは思っているのですが、今までの再編とか全部流れを追えているわけじゃないのですけれど、新しく出てきた観点として、オンラインとかICTとかっていう観点も出てきていて、距離があっても学校間で連携するってことは非常にやりやすくなったのかなと思っています。

なので、前回の第3回、私ちょっと欠席だったのですが、またアーカイブを見させていただいて、いろいろ議論が出ていく中で勉強になったのですが、オンラインとかICTとか新しく出てきたツールを活かして、学校間の連携というのは絶対に必要となってくるのではないかなと思っています。その学校間の連携に、やはり私立も一緒に入ってもらったりして、そういう結局最後はそこにいる子供たちをどう成長させられるかということだと思うので、お互いに足りないところを補完し合うような形をとって全体で何か置いていかれる子がいないようにカバーしていけるっていう体制を整えるのがいいのかなっていうように思います。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。今の学校間の連携を、またさらにこれまで以上に強めていく必要があるのではないかという、そういうご意見かと思いました。ありがとうございます。その他いかがでしょうか。はい、それでは赤荻さんよろしく申し上げます。

【赤荻構成員】

ありがとうございます、赤荻です。よろしく申し上げます。長野県に住んでいる中学校の子たちが長野県の高校に進みたい、魅力ある長野県の高校に進みたいっていうところでちょっとお話しさせてもらえればなと思うのですが、AbemaTVの「今日好き」という番組をご存知ですか。ありがとうございます。

私の肌感だと、今の中学生の女の子がほとんど、大体80%ぐらいは見ているんじゃないかなっていう恋愛リアリティーショーがあるのですが、年に何回も開催していて、いろんなモデルさんだったり、そこに出演してインフルエンサーだったりタレントになることがすごく多いのですが、長野県の公立だったり私立に行っている子で出演されていた子も結構いるんですね。そういったインフルエンサーの子たちを使って、長野県の高校に進学しながらこんな有名になったよとかこんなにビッグになれたよみたいな、長野県の高校に通いながらいろんな活躍ができるっていうPRをしたりだとか、また自分の通っていた高校とか県内にある特色ある学校のいいところをPRしたりだとか、SNSで中学生に向けて県立高校、私立も含めて、こんないいところがあるんだよっていうのを、もう少しPRできたら、中学生の子たちも絶対長野の高校に進みたいって思うんじゃないかなって思いました。

あともう一点あるんですけど、私が中学生のときに有名なモデルさんが通ってるとか文化祭が楽しそうっていう理由で、私は埼玉県公立高校を選んだんですけど、あとは制服がかわいっていうのも結構理由の中であって、長野県の公立高校さんは制服があんまりない、ということをお伺いしたので、今日も駅前のスタバに寄ってきたんですけど多分「なんちゃって制服」を着てる子とかもいて、多分ドン・キホーテとかで買ったと思うんですけど、やっぱり着たいんだなと

思っ、今どきの子も、なので県立高校ごとに制服を作るっていうのもいいとは思んですけど、例えばドン・キホーテだったり、しまむらとかとコラボして、長野県限定の制服を作って、長野県の公立高校に通う、合格が決まってる子とか学生証提示で安く買えるとか、その制服のデザインも、長野県に通う中高生の中からデザインを募集して作って販売するとか、多分予算がかからないと逆にもうかると思んですけども、結構簡単にできそうで、何か新しくて面白いなって思ったので、ちょっと発表させてもらいました。

【村松座長】

ありがとうございます。長野県の魅力をどうアピールするのかという非常に斬新な提案もいただきまして、ぜひですね、こういったイケイケ提案をどんどんいただければと思います。

はい、どうぞ。

【石坂構成員】

保護者の立場っていう話になるんですけど、私立公立分けないで考えてっていう話もあるんですけど、保護者とすれば、やっぱり私立は誰でも行けるところではないお金がかかるっていうのももちろん実際問題ありますし、例えば部活は今、お金がないとできないっていう時代になってきていて、先生たちの負担を減らすために、外部で活動するので保護者が送迎ができないおうちではできないっていう時代になってきて、その費用とかもすごいかかるんですよ。今までは部活を学校でやってもらってたからできたっていうのもあるんですけど、そういうリアルな話もあるので、やはり保護者とすれば、公立の高校で選択肢があるというのが、とても理想的であると私は思います。

【村松座長】

経済格差とか保護者の皆さんの費用負担の方ですね、そういった実際に高校生を持つご家庭としての大きな現実的な問題のところかと思います、ありがとうございます。

【山下構成員】

中山間地に我が家があるのでそのあたりで魅力化というところで、どんなことがあるかなっていうふうに思ったんですけども、ちょうどこのこれからの高校にどのような学びの特色が必要かのところに、林業科が非常に特色あるっていうふう書いてある意見があって、私も地域に例えば産業とか伝統とかすごくあると思うんですよ。そういったものを学べる学科があると面白いな、というふうには思っていて、うちの近くの高校にもぜひリング科をつくってほしいっていうのを言ってるんですけど。

どこの県だったかちょっと忘れてしまったのですが、水産が有名なところで、でっかい水槽を高校の中に設置していて、それを見た魚が好きな中学生たちが、結構県を超えて全国からやってくるっていうのを以前にテレビで拝見したことがありまして、今子供たちは確かにすごく少なく

なっている中で、ただものすごい突き詰めたものが好きな人たちって多分増えてるような気がするんですよね。そういったところに響くような尖った学科っていうのが中山間地校なんかであれば結構面白いんじゃないかなというふうに思います。

【村松座長】

リンゴ科というのは新しいご提案をいただきました。今のようなとりわけ中山間地で少し特色っていうか、尖ったというお話をいただきますけれども、より特色を強めたそういったような学科っていうのが考えられるんじゃないかと。これ前回岩本様からもいただいたお話を私もあの後考えてたのですが、例えば今のような、そういう学科があったときに、その学校のみじゃなくて、まさに複数の学校が連携していればその授業を相互に受けられるようにするとか、一つの小規模校だけで、特色を複数持つというのは非常に難易度が高い話になってくるので、学校間連携がうまくできればいいのではと思います。

次のテーマが地域連携のところでございます。地域連携の方は資料の方でも高校におけるデュアルシステムの取り組み事例ということで6事例ほど載っております。それからそういったデュアルシステムと連動するような形になりますけれども、連携コーディネーターということで学校と社会を繋ぐ連携コーディネーターですね、ここのご提案をいただいております。この役割、効果そしてまたその配置の課題ということですね、人がいていただけるといいんですけど、当然それは知事のお話でもないですけどお金がかかってくるお話でございます、その辺をどのように考えるのか。

それから高大連携ですね。今とりわけの高校の方ですと探究の学びなんかで私どもも信州大学の方でもいろいろ関わらせていただいておりますけども、そういった高大連携のところからですね、大きくは地域連携というところですね、今の山下さまのお話を広げまして、そこまでのところまで、ぜひちょっと自由にご意見いただければと思います。

【鳥谷越構成員】

先ほどの知事のご提言のところから始まって内堀教育長のお話から、再編の基準っていうところから始まったと思うんですけど、今どんな角度から発言したらいいかなっていうふうに思いながら、ちょっと多岐にわたってきたので、どんな発言でもよろしいですか、5番ぐらいまでもう行っていますか。地域連携くらいまで全国募集の話からもう1から5まで全てか絡めてということでもよろしいでしょうか。

【村松座長】

そうですね、大学進学については、この後集中的に扱いたいと思います。

【鳥谷越構成員】

いろんなご意見をお聞きして、ここの観点でというふうに意見を言った方が言いやすいかなとは思ってたんですけど、まず私の発言からさせていただければ、4番のその全国募集のところです。先ほどからもありますけれども、やはり他県から長野県に来てもらうためには、その学校だけ頑張る、前回は申し上げましたけれども、学校だけが頑張るっていうことではなくて、例えば地域の産業が潤ったり、地域に仕事の間があったり、そういうことがあれば、皆さん移住してくるっていうこともあるかもしれませんし、そこに仕事が発生すればご家族が生活しやすくなるっていうこともあるので、やはり学校だけの問題じゃなくて、地域でどういうふうにしていくか、そして地域の中の学校の位置づけとしてどういうふうにしていくかっていう議論もとても必要なとも思っています。単独でやっても限界があるかなっていうのが、この後々の地域連携にも繋がってくるかなというふうにも思いますし、デュアルの話にも行くんだろうなとは思っています。

【岩本構成員】

今あった発言にまさに繋がるどころです。例えば都市部からの生徒募集とかで、都市部からも長野県に学びにこられるようにするとしたときに、寮の話とか生徒の受け入れ環境の話なんかも出ていました。先ほど地域や地域社会とのコーディネーターやコーディネートする人材の配置の話も出ていましたけれども、全国的な状況を見ていると、県立高校だけでやろうとしているところはあまりうまくいっていなかったり、力不足だったりしています。どうやっているところがうまくいっているかという県立高校と地元市町村が協働しているところ。受け入れ環境や寮なんか地元市町村が環境をリノベーションしたり、シェアハウスの的なものを作ったりとかですね、ハウスマスターみたいなのをケアしたり、コーディネーターなんか地元市町村が県立高校にコーディネーター的な人を配置するなどして、それで地域と高校を繋いで一緒にその地域の将来の創り手だとかを育成していくといった発想に立ってやっている動きが非常に盛り上がっている、そういったところが上手くいっているということもありますので、県立高校だけで考えずにどのように地元市町村の当事者意識だとか参画を促しながら協働していくのかということがポイントになっていくと考えています。はい、以上です。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。鳥谷越様からご指摘いただきました、学校でやれることの限界点ですね。そういうものを、いま岩本様にいただいたように、自治体との連携、これが非常に大事な、強力的に、効果的だというお話。そういった自治体と学校とが、今までもそういうようなものが全くなかったわけではないかと思うんですけども、これまで以上に強力的に進めていく必要があるかと思えますし、関連したところで言いますと、ちょうど私の方で出させていただいた資料の方でも触れましたが、例えばこの企業とかでも、そのふるさと納税なんかを使った人材派遣型何ていう提案も資料に入りましたけども、こういうような形で、自治体とともに企業も一緒になって連携するスキームですね、これが本当に今まで以上に非常に大事になってきて、高校だけで確かにこの今の特色化にしても、やっても限界点が出てくる中で、どうやって学校の枠組

みを超えて、自治体それから企業等も含めた、そういった協力体制、そういう部分を構築していくのかは非常に大きな課題だなというのは私も感じるところでございます。

関係するところでいかがでしょうか。はい、安原様。

【安原構成員】

その地域の連携で座長がデュアルシステムについて話を進めましたので、それとの関連で言いますと、県の資料にもどこかに、そのデュアルシステムをもっと普通科にも普及させたいという議論が、最初の方の資料にあったと思います。私も賛成です。デュアルシステムという形は、あくまでも就職の演習みたいな感じですが、日本にはアルバイトという伝統がありますし、もう少し緩やかに、アルバイトを許すというわけではないですが、社会に出るチャンスですね。例えばアルバイト先は学校側が限定してもいいと思いますし、例えばその場合には必ず体験資料を提出するとか、ある程度のいろんな規制が必要だと思います。アルバイトの危険性もありますが、もう少しそこを緩やかにした方がいいんじゃないかなと思います。

それが地域との高校生個人の連携に繋がるんじゃないかなと思います。そう考える、実は裏には、ひきこもりの問題とか。大学に行って中退する、私のところの卒業生にもいます。そういう子を見ると、まったく社会との接点がないまま、大学に行っちゃっているんですね。だから1回も働いたことがない。1回も社会に出たことがない。以前は、地域社会というものの触れ合いがあったはずなんですけど、今はそれがもう学校が用意しなければ、もうチャンスがないんじゃないかという子どもたちもいます。そういうことを考えると、いろんな問題があると思いますが、もう少し高校生が、そういう就労するシステム、体験するシステムを考えていってもいいんじゃないかなと思います。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。今、デュアルシステムに関係しまして、職業系の学科だけではなくて普通科でも考えたらどうかと。そのときに高校生の就業ですね。そういうものに対するご提案もいただきました。この辺は多分、高校生の学業としての保障のところから、高校側で長年考えられてきたところだと思うんですけど、単純に就業というのはそれを利用して社会との接点をつくっていくという、そういう仕組みのご提案かなと受け取らせていただきました。ありがとうございました。

関係したところでもいかがでしょうか。小木曾様、よろしくお願いします。

【小木曾構成員】

坂城高校の小木曾です。今、項目となっているデュアルであったり、連携コーディネーターとかがあっていう話、ちょっと前回またあれなんですけど欠席していたので、アーカイブ見て非常に勉強になって。

特色っていうのが色みたいなものだっていうのが、もうちょっと話を聞いて確かにそうだなと。ちょっと自分の中で思ってるのは、何を学ぶかっていうのは、本当に色っていう感じはして、例えばリンゴ科があるとか、観光科があるとかスポーツ科があるとかっていうのは、すごく色っぽいっていう感じがしていて、今議論しているデュアルとかっていうのも多分特色になるんだと思うんですけど、今度それを生徒たちがどう学んでいくかっていう形のところなのかなっていうふうに思っています。

デュアルっていう形を使って成長してもらいますとか、坂城高校だと少人数をいま研究してるんですけど、少人数という形で生徒たちに成長してもらいますっていうようなこととか、ちょっと両方とも特色にまとめていいと思うんですけど、本当に色っていうふうに捉えられる部分と、あと形かなと。

どういふにその教育をそこでこうしていくかっていうところが、何となく2種類あるような気がして、色と形はもちろん組み合わせられるので、普通科でもデュアルはもちろんできると思いますし、職業科でデュアルももちろんできると思いますし、それでいうと、後の中山間地のところでも言おうと思っていたんですけど、色に特化しやすいのはどちらかという、両方ともできると思うんですけど、色に特化しやすいのは、高校がたくさん並んでいて、生徒たちがどこにしようかって選びやすいところが色に特化しやすいのかなと思ってます。私がいま勤務している坂城高校は中山間地といえるのかなと思ってんですけど、中山間地で前回のところも議論がありましたが、あんまり色を強くしすぎてしまうと、生徒の選択肢を狭めてしまうというがあるので、中山間地や県境の学校で力を入れるべきところっていうのは、もしかしたら形の部分なのかなというふうに、私はちょっとあの前回は見てから今日までで考えたことで、デュアルであったりとか、県教育委員会の方も研究してる単位制であるとか総合学科であるとか、そういういろんなことを、いろんな色を勉強できるけどその勉強の仕方はこんな形ですっていう、そういう部分は、今のちょっと項目が違うかもしれないんですけど、県境の学校であるとか、中山間地の学校の、生き残るって言い方はいま正しくないような気がしますが、価値を発揮する形なのかなというふうに思います。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。今のご提案ですと、具体的ないろんな特色を強く出すというよりは、デュアルシステムだったり、単位制のような、いろいろ生徒たちが多様に学べる仕組みを整えていった方がいいんじゃないかと、そういったご意見ということでよろしいでしょうか。

その他いかがでしょうか。関係したところでも。

【阿部知事】

地域との関係の話がいっぱい出たんで、ちょっと私の方から少しコメントしたいと思いますけれども。まず、石坂さんからお話あった、公立で選択肢があるのか。私も県民対話集会やってて、選択肢が少ないってのは、一つの長野県教育の大きな課題のキーワードでしたので、そこは我々

意識する必要があるだろうと思って。私学はお金がかかるということで、今我々も教育費負担の軽減をどうするかっていうのを検討しています。ちょっと東京都がかなり突出した取り組みをされているので、県民の皆様からすると長野県何やってんだというふうに怒られかねないなというふうに思います。一つはちょっとなんていうか、あまりにも東京に財源が偏りすぎてるっていうことは、ぜひちょっと皆さんと共有したいなというふうに思ってます。本来教育の費用負担の軽減のところは、都道府県市町村がバラバラに考えるのではなくて、本当は国がピンとですね、中途半端じゃなくやってもらうことが望ましいんだろと思うんで、これぜひPTAの皆さんと一緒にその辺は言っていきたいなと。とはいえ長野県何もやらないのかということにはしないように我々も考えていきますんで、またぜひご協力をお願いしたいというふうに思います。

それから部活動にお金がかかるってこれ、学校の通学の送り迎えの話とか、課外活動にかかる費用の話は、かなり私もいろんな方から伺ってきています。その辺もちょっと視野に入れて高校のあり方っていうのを考えていかないと、単にその箱のある場所とか箱の中だけ考えてると、完全に保護者の皆さんとか子どもたちの皆さんの期待を裏切るなというふうに思ってるので、ちょっと教育委員会と一緒に考えていきたいと思います。

あと、山下さんのリンゴ科みたいな話は、先ほど小木曾先生からお話あったような中山間地校と都市部校でどう使い分けるかっていうのはあると思いますけれども、長野県らしい教育って何なのか、一般的な教育の話とは別に、特に高校を出て、地域に就職される子どもたちがいっぱいいる中で、地域のこと、地域の特色とか地域の産業をしっかりと学べるような視点っていうのも、どうしても文部科学省的、画一的なカリキュラムだと、後ろ倒しと言うか横に置かれてしまいがちなので、自治的な視点をもっと強く持つということも重要だと思います。

それから鳥谷越さんがおっしゃっていた、学校単独ではなかなか難しい、我々一般行政もしっかり応援、協力をしなければというふうに思っているんで、私が嫌がられながらもここに出て発言をさせていただいているところであります。知事が教育に口出しすぎると怒られてしまうんですけども、とはいえ、まさに今テーマでいただいているような話を、おそらく教育委員会単独ではなかなか向き合いきれない話だというふうに思っています。そう言う意味で、我々行政内部の、教育委員会と知事部局との垣根を低くしていきたいと思っている反面、学校と地域、特に学校と市町村の連携は学校単位で進めていただきたいなというふうに思っています。

必要であれば、私の方から市長会町村会にもですね、市町村側は、かなり学校とは繋がりがあってると私は感じていますので、ぜひそこら辺ちょっとまさにこれ教育委員会と私が考える話でありますし、ぜひ、学校単位でも市町村の皆さんとぜひ意思疎通をして、一緒にやれることはないとか、問題意識を共有して取り組めることはあるんじゃないかと話し合いをしていただければありがたいと思います。

それから、先ほど岩本さんがおっしゃたように、地元市町村と高校が連携できているところが上手くいっているということは、私もそうだと思います。どうしても、これ県レベルで考えるとなかなか上手くいかない、地域の実情があります。市町村の規模もあれば、学校の置かれている状況もあるので、私の立場はしっかりバックアップします。市長村長に頼めと言われれば、いく

らでも頼みますので、学校単位で地域と繋がることを意識していただければありがたいと思います。

安原さんのアルバイトの話、人口減少の中で人材不足、人手不足という観点と、それから子どもたちが多彩な経験をするという観点から重要な話だと思って伺ったんですが、今って、高校生のアルバイトって、どういう制約がかかっているんですか。わかる方がいたら教えてください。

【石坂構成員】

私はまさに高校生の子がいて、上は大学生なんですけど。学校によって制約があって、ほとんどの学校が禁止です。禁止されている所が多くて、うちの子は工業高校なんですけど、工業は届を出せば認められていたりして。上の子は大学受験が終わって、進学が決まっているのでバイトとなったときも2月までダメだと言われて、結構禁止されている所が多いです。

【阿部知事】

それは全国的にそんな感じ、うちの県の特徴、どういう特徴なんですか。

【小木曾構成員】

坂城高校は、かなりの人数がやっています。だから学校ごとに違うというのが現状なんですけど。申し出をして、色んな家庭環境なり、本人の状況もあるので、特に厳しいきまりがあるわけではないですけど、かなり多くの生徒がアルバイトをしているという状況にあると思います。自分も、こんなことを言うのはあれなんですけど、部活を持っていながら、部活やっている子もバイトをさせています。その両立が君の学びになるからっていうことで、是非やりなさいとまでは言いませんけど、しっかりやるんだよということやらせています。

【阿部知事】

ボランティアも同じ、ボランティアはいいんですか。

【小木曾構成員】

ボランティアは、むしろどんどんやってくださいということ。

【阿部知事】

ボランティアは届け出とか、許可とかはなくていいんですか。

【小木曾構成員】

本人たちが自由にやってもらってよくて。学校を通してというものも色々あって、把握している部分もあれば、生徒が自分でトライしている部分もあると思います。

【阿部知事】

アルバイトは、全部学校が把握している。

【小木曾構成員】

把握するようにしています。

【石坂構成員】

禁止の学校は、隠れてやっている。表に出るのはダメなんです。

【阿部知事】

それは学校長の権限で。

【内堀教育長】

学校によって違うというのが一つなんですけど。基本的には禁止というよりは許可制だと思います。禁止ではなくて許可制、もしくは届け出制に近い許可制。つまり、本人の状況を含めて、本人から届け出、家庭から届け出があったときに話をして、やめた方がいいじゃないですかとか、そういうご事情なら気を付けてやってくださいとか、そういう形を基本的にはとっています。フリーにはやらせてはいないんですけど。許可制で状況を話しながら、例えば成績がうんと落ちている子なんかの場合に、大丈夫ですかといった確認をして、勉強に専念したらいいんじゃないですかみたいな話をするための許可制だというふうに考えます。ただ、多くの所では、許可制なので届け出ずにやっているのは把握できないので、できるだけ許可とってやる以上、許可とってやりましょうねという形が、正式な見解だと思います。

【石坂構成員】

しつこく話して申し訳ない。うち許可の届を出したことがあるんですけど、成績じゃなくて、このままバイトをしなければ退学しなければならぬというぐらいの経済状態でなければだめですと言われました。割とハードルが高いというように感じます。

【村松座長】

今のお話で、様々なケースがあろうと思いますけど、基本的には高校生として通常の学校生活がきちんと送れるということが前提のために、それを支障がないかどうかということで、たぶんチェックという体制なのかなと思いました。今の就労の部分も、かなり注意してあげないと、ともすると本業と逆転してしまうという、大学生でもよくありますので、その辺は非常に注意が必要かなと思いました。ありがとうございました。

それでは、地域連携等につきまして、よろしいでしょうか。堀井さん。

【堀井構成員】

バイトの話を見ると、バイトとかそういうことじゃなくても、世の中では中高生が起業することもある、私が出た横浜の学校も、起業して結構有名になってSFCに進学した子もいましたし、もうそのレベルで見てあげた方がいいと思います。

地域連携については、白馬村は素晴らしいと私は思っております。小中もちろん高校、そして私ども白馬インターナショナルスクールも、かなり連携をしております、村長もかなりいろいろサポートして下さるし、企業の方々もものすごい本当にいろんなサポートを断熱材のご支援をいただいたりとか、あるいはいろんな講義をして下さったりとかものすごいんですね。

外国の方で移住をされる方っていうのは、白馬はいらっしやいまして、何が起こるかっていうと、そのお子さんが行く学校がやっぱりないんですよ。なぜならば、英語しかお話できないので、日本語だとやっぱり小中だとなかなか、日本語全く喋れないお子さんのカバーができないってなったりすると、やっぱり私ども白馬インターナショナルスクールで何かご協力できればというようなことが。どんどんこれが今現実的にすごく動いてるってわけではないんですけども、そういうポジティブなもう希望しかないみたいなお話が結構いろいろ出てくるので。そういうのって、手あげたい企業たくさんいらっしやと思うんです。じゃあ、白馬村どうなってるかっていうと、もちろん有数なスキーリゾートであるということももちろんそうなんですけど。白馬村ではどこのカフェ、どこのレストランに行ってもフリーWi-Fiなんですよ。しかもリスクのあるものではなくて、ちゃんとそこで契約したものを、パスワードつけてそのパスワードを教えていただいて、ホテルでも、何でも、どこ行っても、ネットはもう繋がるっていう状況に今なっていて、それはもちろん白馬村の努力の賜物だとは思っています。

やはりデジタルとか、そういったものに関しては、もうインフラとして、学校にあるように、それがその地域連携もそうなんですけど、その地域にも、それがもういつでも、どこでもできるようになって、それが当たり前の環境になるっていうことが高校を特色化するっていうことだけではなくて、産業界のサポートと、あるいは産業界と行政の連携、産業界と学校の連携っていうのは、産業がやりやすくなれば、当然いらっしやる人もたくさんいると思います。

今日、長野駅にいらっしやった方もたくさんいらっしやると思うんですけど。新幹線降りてからも外国人しか見えないぐらいだったじゃないですか。もうこれ横浜駅より外国人多いんじゃないかと思うぐらい、すごく魅力ある長野県なんです。すごいポテンシャルだと思うので、やっぱりそのコミュニケーション、彼らがここにきて長く滞在して、そしてインフラがあれば、日本のこの長野から自分の本国、あるいはグローバルにもお仕事できますよっていう機会を作ることによって、子供はこんなに素敵な長野で育てようかってなったとしたら、そういう海外のお子さんが、日本で学べるような環境になったとしたら。そうするとやっぱり日本のお子さんでも英語を学びたいっていう、あるいは学べる環境、および海外のお子さんでも、それによって日本の教育システムの中で、英語で学べる環境みたいなものをなんか、すごく長いマイルストーンが必要になるかもしれないんですけども、ラボ校として作れるような感じが、特色なり、そして長野県のインフラになるんじゃないのかなと思いました。ありがとうございます。

【村松座長】

ありがとうございました。

今お話を伺って、白馬の方が非常に今日の話になってきた、その自治体との連携ですとか、企業さんの学校との連携ってのは非常に今のお話で大変うまく円滑に進んでるっていうお話だったんですけども。ちょっと私の方からもう少し今の点をお聞かせいただければと思うんですが、うまく回ってるとこってというのは、やはり、この白馬っていう観光ですね、皆さんが来るっていう立地の要素が非常に大きいのか、それとも自治体の方が村の方が非常に危機感を持ってやってきたとか、何かうまく円滑になったと堀井様の方から見ていただいて、何かポイントになったとこってございますでしょうかね。

【堀井構成員】

すいません、白馬に3年しかいないのであまりよくわからないんですけども。私が見てる限り、もちろん素晴らしいリゾート地であるっていうことの魅力はあると思います。コロナのとき、ものすごく人減ってしまったんですけど、今帰っていらっしゃってます。それはもちろんそうなんですけれども、村長はじめ行政の方もかなり努力をされて、いろんなところでも本当にいろんなイベントがあるんですね。そのイベントをする場所が、もちろん村の施設だったりする場合もありますが、企業さんがお持ちのスペースを使って、そのマルシェを毎週のように秋はやっていたり、要するに白馬って元は冬の期間と、それから夏の8月が、一番観光客が多かったんですけども、それ以外、今でももちろん閑散期であります。でもその週末に山に登る方がいたりとか、あるいは農作物に触れられる方がいるような、とにかく村の行政とか、私が触れてる方々は、例えばその村役場の方とも一緒にお話しますし、食事もしますし、それから村の住民の方もお話しますっていう方が、割と一堂に会していられる場とか、あるいは年に1回ぐらいはそういうことで100人ぐらい集まるようなイベントがあったりとかですね、やっぱり人ですかね。それがやっぱり白馬の魅力かと思います。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。

非常に白馬の方で、様々動いている様子ですとか、コミュニケーションが密になっているっていうなとこですね。これを全県的に同じように展開できるのかっていうのはちょっと悩ましいところがありますけども、一つのお話を聞いていてモデルになりうるようなところかなって思いました。

またアルバイトの話についてもね。起業とかそういうのも、確かにそういうような子供たちもこれからきつとどんどん出てくるでしょうし、そういったものを支援するような、そんな仕組みというののもあっていいのかもしれないと、今聞いていて感じたところであります。

はい。他いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

【阿部知事】

私もよろしいでしょうか。話過ぎてごめんなさい。

堀井さんのお話で外国人の話があったので、ちょうど、私の問題意識をお話しておきますと、もうこれから世界に開かれた長野県にしていけないことには、もうこの地域の活力の維持はいろんな意味で難しいというふうに思っています。そういう意味では、ぜひ、学びであったり、高校のあり方を考える上でも、今までのドメスティック型の教育システムじゃなくて、もうちょっとグローバル社会を意識した、ありようというのを考えていくことが必要ではないかなと思っていますが、堀井さん、前からデジタルと英語を長野県全体の特色にしたら、というご提言いただいているので、非常に私は共感しながらお話を伺っています。

今、例えばエイチ・アイ・エスであったりアイザックであったり、外国から来る子供たち、あるいは、英語で学びたい子供たちのニーズっていうのはどちらかというと公立はあまり受け持っていないという状況です。全国的にそうで、私学がリードしていただいている、それはそれで良いことではありますが、先ほどの公立私立もっと一体で、みんなでやった方がいいよねっていうことからすると、公立はどういう役割を果たすのかということのを今一度、しっかり考えなければいけないのではないかなというふうに思います。

例えば、国際高校みたいなのを作っている県もだいぶ増えていきますし、留学生の受け入れであったり、帰国生の受け入れであったり、あるいはこれから長野県に定住される外国人も増えていこうというふうに思います。

そうすると、日本の教育に馴染んでいただくということが必要でありますので、日本語教育をしっかりやんなきゃいけないということの反面、しかしながら、来たての子供たちに、いきなり日本語で授業を受けるっていうのもなかなか難しい場合もあるので、そういう意味では、外国の子供たちに対してどういう教育を提供するのかっていうのはやっぱり、高校においても、しっかり考えておかなきゃいけない課題だと思いますし、加えて、このまえ知事会でもずいぶん議論しましたが、入学時期が日本は4月で、9月入学のところが多かったりするので、今、学校教育法の縛りで義務教育学校については4月入学しか認めないという、極めて硬直的な学校教育システムになっているというふうに思っていますけども、そういうことの柔軟化もですね、制度的には求めていかなきゃいけないと思いますし、あと、ネイティブの人たちが、教壇に立てる、特別免許とかなんかも必要になってくるのかもしないですけども。

いま外国語の授業って長野県内、外国籍の方の教員ってどれぐらいいるのですかね。正規教員はいないのか。都道府県によって正規教員を雇っているところはあるのか。

【内堀教育長】

公立では正規教員はいない、基本的には講師ですね。

【阿部知事】

それは排他的な日本の国柄を表しているじゃないか。

【内堀教育長】

国の法律です。

【阿部知事】

国の法律というのは地方公務員法を言っているのか。

そういう意味ではちょっとなんていうか、グローバル社会に対応するという観点をしっかり持っておかないと、この長野県でできることは、もう少し突き詰める必要がありますし、制度的な課題についてはもっと、国に問題提起して変えさせないと、我が国の教育のガラパゴス化が進んでしまうのではないかなというふうに思う。

堀井さんの外国人のお話があった、これちょっと何というか、長野県の政策全体に関わる話でありますので、教育委員会でもしっかり考えていただけるとありがたいなというふうにご要望を申し上げますのでよろしくをお願いします。

【村松座長】

ありがとうございました。

今いただいた話もかなり国際的な部分に入っておりますので、そうですね、議論の順番も少し変えさせていただきまして、国際的な学びそれから国際バカロレア、この辺の話の方にも進んでいければと思います。

今、阿部知事の方からいただきました、外国籍の教員の件ですけれども、正規は今お話しいただいたような形でおられないかと思うんですけど、特別免許ですね。これはちょうど私も、実はその審査もやっております、毎年何名かですね、例えば、軽井沢のアイザック様ですとか、それこそ白馬の関係ですとか、その審査は行っているんで、そういった形で全くいないわけではないということではご承知おきいただければと思います。

はい。どうでしょう、この国際的な学び、ちょうど資料でいいますと7ページ8ページのところですね。その課題で出されております。今、いただいたお話の中でも2通りの国際的なことで考えなくちゃいけない視点があるのかなと思いました。

まず今、県内にいるこの子供たち自身がその海外に出ていたりとか、海外、外国語を学んだりっていうグローバルのことを、今の生徒たち自身が学ぶ話と、それから先ほどのように外国籍の入ってきた生徒さんたちがどう学ぶのか、外国籍の子供たちにどう対応するのかと2系統の話が話題として出てきているかと思います。

はい、この辺に関係したことでいかがでしょうか。

【堀井構成員】

ちょっと私もちょっとだけ前もってお話をいただいたので、白馬インターナショナルスクールは、国際バカロレアは採用しないという決断をしたんですけれども、国際バカロレアの話をもし

するとするならば、皆さん、ご存知の方ももしかしていらっしゃるかもしれないですけど、公設公営で広島県の方に国際バカロレアの学校があるんですけども、国際バカロレアはどういうものかという事は、ちょっと今お話するとすごく長くなってしまいますので、ちょっとおいとくとして、要するに国際的にどこの大学、日本もそうですし、海外の大学にも行けるライセンスになりますので、先ほどのお話の流れから言えば、外国から来たお子さんがこの高校、この公立高校は国際バカロレアの学校ですよっていうふうになったとしたら、とてもわかりやすいだろうなとは思いますが。

国際的なインターナショナルスクールのライセンスもたくさんございまして、うちはバカロレアをとらなかったんですけども、なのでそういう意味では国際バカロレアの公立高校がここにあるっていうふうになると、海外のお子さんにしてみればわかりやすい。

それと、あともう一つには、やっぱり公立高校で国際バカロレアを作るっていうのは圧倒的な強みといいますか、なんていうんでしょう、学費が、他の私立の学校とかインターナショナルスクールの国際バカロレアに行くとなると、相当な学費がかかるんですけども、もし公立でできたのならば、それはもう非常に学費の面においてはすごくご家庭にとってみると、いい機会になるのではないのかなとは思いますが。

ただ、その大学進学、この後多分、進学校の話がされるのかなと思いますけど、その大学進学を含めて、そのカリキュラムが非常にタフなカリキュラムでございまして、探究学習だったりとか、知の理論と言って、知識というものはどういうものなのか、知とはどういうものなのかっていうのを考えるものとか、私も研修を受けて、非常に素晴らしい教育活動だと思います。

それを採用する場合にはそういうところをなぜそれを採用するのかっていうこと。もちろん、ご覧になっていただくとは思いますが、非常にタフで、どこの私立高校も、大方やっぱり偏差値の高いお子様がいらっしゃるっていうところではございますので、やはり、その国際バカロレアだからいいというわけではございませんので、どこのメリットをとって、そして、県として、どういう戦略でやるのかっていうのは慎重に考えた方がいいのかなというふうに思います。

ただ、その普通の国際高校になって、神奈川県も横浜国際があれば、東京にも都立国際って素晴らしい学校がありますけれども、その国際高校を使って、英語で授業を行うっていうことを、それだけだったとしても、日本の高校卒業のライセンスは当然取れますし、日本の大学には行けますので、いろいろ模索する手段はあるのではないかなというふうには思います。

【村松座長】

はい。ありがとうございました。

このバカロレアの関係ですね。私は、知人の教員とかでこの辺の国際バカロレアの学校とかに勤めていて、やはり、この内容は非常に素晴らしいですが、実際のカリキュラムだとかそれを越えるハードルが非常に高いので、これを公立でやるのかっていうのはかなりの覚悟が必要だっていうのは感じてはいるところでございます。

ただ提案としては、今後の国際化を見据えたときの一つの方向として検討できるものかとは思いますが、どうでしょうか関係したところいかがでしょうか。

岩本様、どうぞ。

【岩本構成員】

私も公立の国際バカロレアの学校ということのメリットはやはりあるとは思いますが。

一方で、先ほど座長言われた通り公立で運営できるのか、そのノウハウも多分長野県の公立教員の中に多分ないでしょうし、一般的にインターもそうですし、国際バカロレアは私立が牽引してきているというようなところもある中で、先ほど知事もおっしゃってたんじゃないかと思えますけど公設民営という手法なんかもやり方としてはあるということで、大阪でも公設民営のグローバル人材育成の特区ですねやってますしというところで今後多分検討研究されてくる中での一つの選択肢として本当に世界に開かれた長野県を創っていく、それを当然私立とともに公立でもそういう選択肢をとという話になるのであれば、そういった公設民営的な発想なんかもうまく活かすみたいな検討もあってもいいのではないかというふうに思います。

【村松座長】

ありがとうございました。先ほどバカロレアは非常にハードルが高いというお話をさせていただきましたが、それに対しまして公設民営ということで、本当に公立と民間のところで協力する形で、そのハードルをちょっと越えていったらどうかというご提案かと思えます。ありがとうございました。

その他いかがでしょうか。よろしいでしょうか。今この辺の話でバカロレアの先ほど堀井様からお話があった大きな一つの課題のがその大学の進学に繋がっていくっていったときに、その辺で教育過程上どうかとかっていうところをやっぱりこのバカロレアなんかの一つの日本の中に進学するとしたらですね、大学なんかでの課題になってくるかと思えます。

そうしますとこの大学進学それから中高一貫のこの辺の話をしりまめて集中的に議論できればと思います。前回の議論の中でも進学実績の話とか基礎学力の話もありました。この資料の中でも14ページからですかね、大学進学を切り口とした特色化で特定の大学の進学支援を特色とした高校は長野県に必要なのかとかですね、その次は15ページが中高一貫校ですね。一通り現在一段落している状況ですけれども、更なる併設校というのは必要なかともありました。この辺につきましていろんな観点からちょっとご意見いただければと思いますので、いかがでしょうか。大学進学、それから中高一貫校、この辺のところをちょっと取りまめてまして、ご意見いただければと思います。安原様お願いいたします。

【安原構成員】

中学生からしてみれば高校の魅力というのは、同級生や先輩を除き高校そのものに求めるものとしては、保護者の方もそうですが、やはり進学・進路状況ですね。進路実績。それと授業が面

白いかどうか。そこにあると思います。だからどうしても大学進学率は、重要になってくると思っています。

そこで、例えば理数科とかですね、今もある学校もあるけど、昔は例えば、特進クラスとか、理数科とかあったと思います。これが差別に当たるというような発想で少なくなったのかなと邪推しているのですが、これはあくまでもやはり、非常に優秀な子たちのチャンスですね、高等教育、最高学府に行くチャンスというものをちゃんと提供してあげるのも大事なことだと思いますので、いわゆるトップ校と言われる高校には、そういうクラスを設けても良いのではないかと単純に思います。

【村松座長】

ありがとうございました。いわゆる特進クラスですね、いろんな議論で先ほどお話しいただいたような形でちょっと一定のところでは止まっているところですけど、それをもうちょっとこう広げてもいいんじゃないか、そういったご提案かと思います。この辺どうでしょうか、ご意見ありましたらぜひいただければと思います。山下様お願いします。

【山下構成員】

すみません。ちょっと保護者の立場からっていう形にはなるんですけども、中高一貫校については非常に魅力的だなというふうに感じています。やはり大学進学ってというのがどうしても今の日本の教育の中では目標になってくると思うんですけど、それと中学校に入って、高校受験して高校に入って大学の受験までを勉強してっていうとこの中学校高校のこの6年間ってというのが割と勉強漬けになってしまうというか、ただその時期って子供たちにとってはすごく青春の時期というか、いろんなことを感じたり、経験できる6年だと思うんですね。

それが「受験」っていう目標のために6年間を費やしてしまうのは、少しもったいないかなって親としては思っています。

実際にうちのところだと、中高一貫校2校の選択、屋代高校はそのまま受けようと思えばまだ受けられるんですけど、市立長野中学校に関しては、実際に長野市に住民票がないと駄目なので、祖父母が長野市にいるからって言って子供だけ住民票そっちに移して受験するっていう方もいらっしゃるぐらいっていうふうに聞いたことがあります。

やっぱりその中高一貫校の魅力を保護者は感じているってところだけになってしまうんですけど、意見としてお伝えさせていただければと思います。

【村松座長】

はい、ありがとうございます。中高一貫校には非常に魅力があるということですね。保護者のお立場からのご意見いただきましてありがとうございます。

そのほか関係したところでどうでしょうか。いかがでしょうかご意見いただければと思います
が、安原様どうぞ。

【安原構成員】

何か言い忘れていたなと思っていましたが、中高一貫校でしたのでそれについてもすいませ
ん、言わせていただきますと、これは山下さんが言われたような魅力がやはりあると思います。

中高一貫校を新しく作れば、必ずそこに人、生徒が集まると思います。山下さんは余裕がある
という観点をおっしゃってましたが、やっぱり保護者としては、進学を考えてということになる
と思います。中高一貫の多くの魅力は、先取り教育をする。だから中学校の段階で高校の内容を
やる。これ自体はすごくいいことだと思うんですが、結局山下さんの言われるような余裕がある
勉強になるかどうか、そこをちょっと見極めないといけないかなと思っています。結局トップ生
の取り合いの中で、中高一貫校が優秀な子を先に抑えてしまう構造ですね。それはそれでいいか
もしれないですが。私も東京でちょっと私立受験をやったことがあります、中高一貫校でやる
ことは、結局は先取りなんですよ。それが本当に深い学びにつながるのかどうかというところ
も考えた方がいいかなと思います。

もちろん、中高一貫をすることによって、すごく深い教育ができる可能性はあると思います。
今大学受験は本当によく考えないと解けない問題になっているので、それを与えるチャンスとし
て中高一貫の方がいい気もするんですね。ただ、全般的に、今の高校教育のカリキュラムだと正
直、共通テストに対応できないんじゃないかという気もしきていますので、そこは慎重に判断し
てもいいかなと思います。

【村松座長】

ありがとうございます先ほどの高校の魅力化でもその全国から奪い合うっていう話のように
今度はその中学とその中高一貫校で力のある生徒さんを奪い合う、そういうようなことをちょっ
と懸念点としていただいたかと思います。本当やっぱりこの両面これあって検討しなくちゃいけ
ないところかと思います。その他いかがでしょうかご意見いただければ、小木曾様お願いしま
す。

【小木曾構成員】

坂城高校の小木曾です。今の中高一貫っていうの、目指される場所と違うかもしれないん
ですけど、私が所属する坂城高校はそこまで大学進学が多くはないので、そのニーズに関して他
の学校の経験もあるので必要な部分もあれば、うちの学校だったらどうなのかなってことを考え
ます。中高一貫校の資料の中に一貫校のタイプがいろいろありまして、中等教育学校と併設型と
連携型があり、県内の中で併設型が今二つできているという形になっていると思います。坂城高
校という場所で可能性があるのだとすれば連携型なのかなということも思っていて、地域の中学
校と連携することで、3年間という時間でなかなかできないような、もっと幅広いカリキュラム

を作ってあげられる。なかなか小中学校の先生方と交流する機会が少ないので、そういう機会があれば、より教員のスキルアップにもなるってところで、今県にはないですけど連携型の中高一貫っていうのも、今の目指しているところとちょっと違うかもしれませんが、可能性が十分あるものなのかなというふうに思っています。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。今言った同じ敷地内での併設型だけではなくて、連携型ですね、これ多分県内の小中学校でも少しずつこういうような形ができつつあるということで、多分一番私も見ていて思うのは、その高校と中学の先生方が、いま小木曾先生が言われたような形で連携することによってお互いを知ったりとか、繋がっていくっていう、堀井様のコミュニケーションの話もありましたけど、結構この中学と高校のところでやっぱり義務と高校ということで少しハードルがありますので、そのところが連携みたいな形でできるとまたちょっと新しい展開っていうのもできるのかなと今のお話伺ってて思った次第であります。ありがとうございました。

その他いかがでしょうか。はい、岩本様、お願いします。

【岩本構成員】

今の中高一貫のところに関してですけど、まず生徒の奪い合いという発想ですけど、どうなんですかね、大人の視点で見るとそういうふうに見えるのかもしれないですけど、生徒側の視点に立つと、別に奪われ合ってるというよりは、おそらく選択肢が増える、そして自分にとって行きたいところに行ける、魅力があるとか自分に合うというところに行けるようになっていくということで、選択肢を増やすことに対して、あまり奪い合いになるからいけないんじゃないかみたいな発想はどちらかという大人側の視点な気がしてですね、そこまで気にする必要があるのかというのはちょっと一つあるんですけども。

とはいえ県立で、中高一貫をやろうとする、やったときって、地元の公立中学校を持つ市町村がそれを嫌がるっていうケースというのはやっぱりあるかと思います。今後中高一貫というのは非常に魅力のある形態、魅力・特色を出しうる形態だと思いますので、その研究、今後検討されるにあたって、やはり先ほどもありました連携型もしくは併設のそれぞれのメリットデメリットというかですね、よくよく研究された上で、やはりその地元の市町村とか、もしかしたら中学校だとか、そういったところとうまくハレーションを生みにくいような形で何か展開できるという、その両方のいいとこ取りですね、できる形というのを長野モデルみたいな形で打ち出した中高一貫というのができる、やはり地元からも来るし、外からも行きたいとなるようなものになっていくんじゃないかなというふうに思いました。以上です。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。

生徒側に立った視点からのご意見と、それから具体的な今の市町村との連携の重要性ですね、そこら辺のご提示をいただきました。

これ前半の方でお話しておきましたその公立と私立とか自治体の連携だったりと同じような形で、やはりこの仕組みをどういうふううまく作っていくのかってそこが今の連携型にしても、うまく市町村とこの県との中学校高校との連携ができると、本当に学校だけではなくて、先ほどからお話に出ているような自治体との連携とかこういうところにも何か繋がっていくような、そんなことも今感じたところでもあります。もちろん今岩本さんが言われたように、非常にいろんなことを考えて検討しなくちゃいけないところが多々あるんだろうなと思いますけれども、一つ可能性としては考えてもいいのかなっていうのは感じたところでございます。ありがとうございます。

その他いかがでしょうか。石坂様、お願いします。

【石坂構成員】

うちは上の子が市立長野出身でもう卒業してるんですけど、中高一貫校でした。校舎は繋がっていて施設は全部一緒に使っていて、先生たちも職員室一つっていう感じで、ただ、うちの子が高校に入るときが、ちょうど1期生、中学の1期生が高校に上がってくる年だったので、おそらく試行錯誤だと思うんですけど、1年生のときは中学から上がってきた子だけのクラスで、2、3年は混合でクラスを組んでいたんで、大学受験に特化したクラスができていたというわけではなかったです。

総合学科というのもあったと思うんですけど、ただやはり保護者としたら、やっぱり中学から入って高校受験の時期に余裕があるというのは、とてもいい面があると思います。

あとは市立という学校が、長野にはここにしかないんで、とても手厚かったというのはあります。2番目が県立高校に入学するときに、あっ、全然違うというふうに、申し訳ないですが、色々思ったこともあったので、例えば2番目の子はタブレットを保護者が購入してくださいという案内があったんですけど、市立は全員貸し出しというか配布があったりとか、その辺もやはりお金の面でもだいぶ違うなっていうのはありました。

あとはもう一つ、進学のカラスのことなんですけど、前回もちょっとお話ししたと思うんですけど、私、県外、京都出身で、私が高校に行ってる時は、特進クラスというのは受験の段階でもう特進クラスの受験というのがあって、文系の特進クラス、理系の特進クラスというのがあった状態で受験をして、もしそこに落ちた場合も普通科に入れるという仕組みになっていました。その特進クラスに入れなくても、2、3年のときに、成績が良い子はさらにその下の理系クラス文系クラスっていうのがあって、それは成績によって編入するっていうのがあったんですけど、この辺でも例えば、長野高校とか吉田高校とか、いわゆる進学率とかを売りにしてるというか、そういう高校に関しては、そういう特進クラスをさらに作れば、もっとこう特化したクラスになるっていうのはあるんじゃないかなっていうふうには思います。その辺は保護者の意見ですね。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。

今の公立と市立、県立と市立との違いの話、それから、特進クラスみたいな、こういうものは設置しても、力を入れたような形、こういうのもありではないかというようなご意見もいただきました。この辺は、様々これまでも長らく県内の方でも議論されてきて今のような形になっているところかと思えますけども、関連してどうでしょうか。ほかにご意見等いただければと思いますが。はい、どうぞ、堀井様。

【堀井構成員】

中高一貫と大学受験みたいな感じでお話すると、進学に関することです。

今年の2023年の数字が出てるかわからないのですが、多分2022年の入試ではもう一般選抜が4割ぐらいしかなくなっちゃっていて、かつて推薦と言われる総合型選抜が増えている中で考えると、総合型選抜をどう一つの戦略として視野に入れたら、むしろ皆さん今、肯定的に考えてらっしゃる方も比較的多い中高一貫の方が、メリットがあると思います。

普通に高校3年間だと、学校に慣れました、探究型をやります、その後、受験対策をしますってなると、どうしても時間が短く感じられるんですね。やはりもうちょっと早い段階から探究であるとか、自分の興味関心みたいなものに触れる時間を増やしたりとか、その環境を作ったりとか、機会を増やすことが、今後の大学進学で、大学もいろいろ改革されてると思いますので、そういったものに直結する。そうすると高大連携も、その対話、コミュニケーションで出てくると、長野県としてできる中高一貫そして探究型でどういう進学を実現するかという意味で、特色のある学校が作れるなっていう妄想をしてみました。

【村松座長】

ありがとうございます。

今の探究的な学び、それから総合選抜の話ですね、これについても、ちょっと手前どもの話で恐縮ですが、私どもの教育学部、来年から地域枠ということで、中山間地の教育に熱意のある学生さん、生徒を入れるという枠なんすけれど、それは今お話しいただいた総合選抜の共通テストを課さないという、スタートはそんなに多くないんですけどもその翌年以降やはり増やしていく予定です。

同じように、私どもの信州大学内でもそういった総合選抜みたいなところはありますし、先ほど特別進学のお話があったんですけど、これ多分イメージするのが、以前のイメージだと本当に受験勉強を頑張ろうっていうガリガリというのが多分多くのイメージだと思うんですけども、私も例えば都内の私学さんとかそういったのをやってみると今まさにこれ堀井様が言われたような感じの探究に本当にすごい力を入れられているんですね。もう高校生の研究発表というのも大学生の卒論より下手したらいいんじゃないのみたいな、そんなことを高校生の子たちが県内の本当に探究の発表会でも非常にいろんな高校生たちが素晴らしい発表してくれると思うんですけど

も、特別進学といったときに、以前のようなちょっと詰め込み型での進学っていうのから、これから、もし仮に設定するとしたら、やっぱりちょっと違ったタイプの、本当に今言われたような高大接続だとかそういうような探究的なものを深めていくような、質のちょっと違ったものがきつと必要なのかなっていうのは今のお話を聞いていて感じたところでございます。ありがとうございます。

どうでしょうか、関係したところで、はい鳥谷越様、よろしくお願いします。

【鳥谷越構成員】

堀井さんそれから村松先生と全く同感であります。私も特進クラスのある学校に教頭として3年間赴任していた経験があるんですが、やはりその差別化、選別化ということに対して、保護者からのご意見、ご要望は本当に両極端のご意見をいただいて、毎年のようにこの特進クラスをどうしていくかっていうのは、職員の間で議論した経緯があります。

また別の観点からすると、いま高校では探究的な学びが本当に進んだなっていう印象は持っています。長野県が進める学びの改革の探究県長野ということが本当に私も身をもって着実に形になってきてるなっていう思いはあります。その中で大学の受験に関しても、面接のときにどんな探究のテーマであなたは探究をしてきましたかっていうのを必ず聞かれるような受験にもなってきたということで、点数を取って頑張って一般入試をとというのももちろんなんですけれども、その探究を武器にして、生徒が進学をしていきたいっていうそういう形もだいぶ進んできているなっていうふうに思うんですね。なので、もう探究県長野の中で、この中高一貫のように中学のときから探究的な学びを駆使しながら高校に入っても、自分の問いを常に持ちながら学びに向かえるっていうものはとてもいい形だなと思っています。

ただこの中高一貫校をものすごく今後増やしていったらいいかどうかというと、私はあんまりそうは考えなくて、この最後の教育委員会の考え方というところにありますけれども、現行の2校の体制で検証していくってことしていくのかなとは思っていますが、中高一貫の学びの重要性や成果というものは、素晴らしいものかなとも思います。ですので、私はその特進クラスをつくるですとか、進学に特化した高校っていうよりも、どこの学校でも探究をしっかりと根付いたものをやって、高校生が自分の問いがそのまま引き継がれて大学に行けるような県であると、とてもいいかなと思っています。

先日中学校の探究の拠点校として、研究校としてやられている学校にも見学に行かせていただきましたが、中学の探究もだいぶ普通の市立の中学校ですけれども、進んできたなと思います。これはうかうかすると高校もちょっとやれちゃうなっていう感じで、高校もいろいろ形だけは整っているんで、深い探究的な学びがもっと進んでいくようにできたらいいなと思います。

それでさっきの話に戻っちゃうんですけど、実はあの教員っていうのは、やはり授業を教えるとか、その専門的に学んできたことを教える授業にプライドもあって一生懸命やってきてるっていうもので、ここまできていますので、なかなか探究のコーディネートをするっていうこと

が苦手というノウハウがないんですね。ですので、地域連携をとってもやりたいんですけども、ぜひ支援コーディネーターをつけていただきたいと思っております。以上です。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。

今、長野県の教育の総合基本計画でも、探究の学び探究県長野っていうのを示しているところですけど、そこのところをやはり強力に進めていくべきだと。しかもそれを特定の学校というよりも、まさにいろんなところでそれが選択できるように、多くの学校でそういった今の探究の学びとかやれていけるようなそんな仕組み、そんな政策ですね、最後の予算措置や人のお話もあります。またここはぜひお願いしたいところでございます。

先日12月にですね、高校教育課さんからご依頼いただきまして、DXハイスクールですかね、1校当たり最大で1000万ぐらいですか、国が予算出して、県内で換算すると20校分くらい。そういうところで新しいいろんな学びをできるような予算をという国の動きもありますので、ぜひそういったものうまく活用しながら、積極的に行ければと思います。

やはり何名か私どものところにその視察に来られてですね、そういう3Dプリンターとか置けるようなラボとか見せてくれてっていうので、高校さんで見学に来たりしてるっていうのも、少しずついろんな学校さんが取り組んでいる、今動きが出ているなっていうのはちょっと肌感覚でも感じてるところであります。

ありがとうございます。その他いかがでしょうか。では、安原様。

【安原構成員】

私が提案した特進クラスについて鳥谷越先生にコメントされましたので、ちょっと議論を深める意味でもそれについては、また言ったと思いますが、いま共通テストの話をしたんですが、非常にいい問題だと思います。考えさせる問題ですが、例えば微分積分なんかをそのまま覚えればいいっていうんじゃないかと、それをどう使うとか、そもそもそれは何だと、そのテストを受けるとそこで発見があってそれを使えばこんなに簡単に他の問題も解けるんだというような一つの教育の形まで示してると思うんですが、いかんせんそれを教科書レベルの教育では難しい。だから、探究が必要だと思うんですが、多分大学入試センターの考えとしては、それそのものが探究だと。

私が提案した特進クラスというのも、例えばまさに学問的な探究をするクラスとして存在しているんじゃないかと考えます。そうしないと堀井さんが言われたように、ほとんど共通テストを受ける子はいません。実際にどんどん下がって、みんな少々勉強しても太刀打ちできないから、他の推薦とかで受けるという子がいます。だから、あくまでも基本路線は賛成なんですけど、そういう子たち、本当に学問で頑張りたい子たちのためにそういうのはあっていいんじゃないかと。PTAのいろんな付き合いがあるかもしれませんが、もう一度考えてもいいんじゃないかなと思います。

あと中高一貫に関しても基本的には私は賛成だと思いますが、まさに鳥谷越先生が言われたように、かなりのスキルがないと、結局ただの箱になってしまって、早く先取りを教えて、その分余裕があったところで探究をしている。その探究が何なのかというのには、かなりのスキルがいると思います。だから、県の方も何かの資料ではモデル校というのは公募制だということを挙げてはいたと思いますが、あくまでも公募制で、名乗りを上げた高校があれば考えてもいいと思います。が、その点と、付言していえば、今なぜ中学と高校というシステムあるかということ、中学で出会った環境以外の人たちが集まる、その高校の良さはあると思います。これはまさに中高一貫では味わえない、つまりずっと一緒の人たちじゃなくて、また新しい社会、新しいコミュニティと出会うというのは、それはそれで貴重な経験かなと思うんで一応付言しておきます。

【村松座長】

ありがとうございました。安原さんが補足いただきました。本当に多様な子どもたちが集まるからこそその良さっていうんですかね、そういったところをまたご提示いただいたかと思います。ありがとうございました。大学進学、中高一貫ではよろしいでしょうか。

【阿部知事】

知事の立場でこの2点についてコメントしておきたいと思います。まず進学の話については、ぜひ産業界とか地域の声をしっかり聞いて、教育委員会で議論していただく必要があると強く思っています。

例えば医師確保、長野県には非常に重要なテーマであります。医師の方たちを長野県で働いていただくということでお話をさせていただくと、教育の問題についてかなり言われます。大学進学をしっかりできるようなサポートをしてくれるのですか、というような話ですね。今まさに人口減少、少子化の中で、やはり教育、今までは産業があるとかですね、あるいは長野県でも自然が豊かだということで選んでくれる人たちいますけれども、教育の充実度で選ぶ、選ばれるということはかなり側面としては強くなってきていると思っています。だからこそ、例えばH I Sであったり風越学園であったりそういうところを選考してこられる方が大勢いらっしゃるということだと思います。もとより教育内容全般も関わりますが、やはり進学がどうなっているのかというのは、かなりそういう場合の関心事のひとつであることは間違いないというふうに思っていますので、そのところはしっかり考えていかなければいけないというふうに思っています。

中高一貫については、ここだけ教育委員会の結論がこの紙に出ている感じがして、これ再編計画のまとめのときにそう考えたという理解でいいんですかね。地図を見た時に、広い県土の中で、かなり偏在しているなというのが知事の立場としては結構気になります。今、長野県は交通の問題をどうするかということを議論していますが、交通の問題でひとつ対応していかなければいけないのは子どもの通学の話だというふうに思っています。先ほど来申し上げたように、子どもたち、保護者と話したときの教育の課題、選択肢でありますので、どこに住んでも一定程

度の選択肢があるようなことを目指していかないといけないのではないかなというふうに思いますので、それを考えると中高一貫の話は、長野市、松本市周辺に偏在しているというのは、ここを県としてもしっかり考えていく必要があるのではないかなというふうに思います。

それから鳥谷越さんがおっしゃっていただいた、特進クラスみたいなものはいろいろ賛否両論あるということで、まさにそうなのだろうなというふうに思います。私が思うのは、ただ、それを各学校が保護者と頑張っている姿でいいのかというのが私の問題意識です。東京都は進学重点校の制度として東京都で作って指定してやっているわけでありますので、この中高一貫の問題にしても、進学重点校的な話にしても、やっぱりこれは県議会も含めてですね、県民が何を期待しているのか、賛否両論あると思いますけども、県としてしっかり選択をしていかなければ、学校現場でいろいろな意見があって、先ほどのアルバイトもちょっと私若干気になったんですけど、学校の方針で決めていく話と、県全体で決めていく話と、やっぱりそこをしっかりと考えていかないと、最終的にはこの公立学校でありますから、納税者とか県民がどう思うかというのが、私の立場からすると最も重要で、しかしながらそうは言っても学校現場では対応できませんとかですね、そうは言ってもやっぱりそれよりこっちの方が合理的ですというふうに県民の皆さんに説明ができれば、県民の皆さんの多数がそういう意見であってもその意見通りに私はしませんけれども、ただこの教育の選択の話についてはもっとオープンなですね、議論が必要なのではないかと。この場で私かなり知事としてコメントさせていただいているわけですけども、やっぱりこういう場でも教育長なり教育委員会としても考え方をもっともって出してもらわないと議論が進んでいかないのではないかっていう気がしますので、ぜひそういう開かれた議論をもっともって進めていくと。そうした中で、今の進学の話や中高一貫の話はかなり議論が割れる話だと私正直思います。ただ、だから議論をしないということじゃなくて、やっぱりしっかり幅広い議論をした上で選択をしていかないといけないというふうに思っていますので、ここは教育委員会と一緒にその辺のプロセスをしっかりと考えていく必要があるというふうに思っています。

私の問題意識は、やはり保護者の声であるとか、地域の声というものを、ぜひ教育についてもしっかり反映をしていただく必要があるなど。そして説明責任を教育委員会においても果たしていただきたいということですので、よろしくお願いします。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。

県の特徴じゃないですけど、教育そのものを充実させていくというのは県の大事なところで、いろいろな県民の皆さんの声を反映しながら考えていく必要があると、それはお話の通りかと思えますし、そして選択肢が増えるってことは、もちろんそういう方向で皆さんできたらいいなと思うんですけど、一方で先ほどのコーディネーターの話であったり、最初のところでの公立私立のお話のようにお金の予算の話と人の話というのは必ずついて参りますので、その両面をにらみながらですね、少しでも最適な方向に議論が進められたらと思っています。よろしくお願いします。

そうしましたら残された時間もちょっと限られてまいりましたので、続きまして職業系高校のお話に移らせていただいてもよろしいでしょうか。この資料でいいますと、16ページとかですかね。県立高専の設置についての効果とか課題というようなことで、そんなご提案もあります。こういったことも含めまして職業系高校、前半の方でちょうどデュアルシステムのお話も出てまいりましたけども、職業系高校につきましてご意見等いただければと思いますけども、いかがでしょうか。赤荻様よろしくお願ひします。

【赤荻構成員】

職業系高校とはちょっとそれてしまうかもしれないですけど、長野県の高校全体でSNSの教育を入れた方がいいなと思っていて。というのも、うちの学校では、SNS、英会話、動画編集ビジネスを中心に生徒たちに学んでいってもらっていますが、実際に都内の企業とかで、SNSのフォロワー数によって、採用を決めたりとか、あとは新入社員で、インフルエンサーの方が、他の新入社員さんより初任給から5万円以上の収入の差が出たりとか、ちょっと現実で。本当にSNSの使い方が上手であるとか、あとは自身がインフルエンサーだと優遇されるっていうことがあります。

各学校の先生たちがSNSについて教えるっていうのは難しいと思うので、例えばうちの学校のSNSの授業を各学校で流してもらって、本当に1学期に1回でも学んでもらうとかでもいいと思うんですけど。私が言いたいのはインフルエンサーに皆さんなってほしいってことじゃなくて、SNSの使い方であるとか、将来どれだけ優遇されるかっていう現実をちゃんと知らないと時代に取り残されるというか、結構メリットがたくさんあることなので、しっかりその現実を知ってもらって行動を起こしてもらった方がいいのかなと思って、ちょっと意見させていただきました。

SNSを学ぶっていうのも、将来のことを見据えてっていうのもあって、SNSの使い方が上手だと多分、10代全体で長野県の10代の子たちがSNSの使い方上手になれば、その10代全体で長野県自体を盛り上げられると思います。私すごい旅行とか好きですし、いろいろなことに興味があるんですけど、長野県のここ行ってみようってなったときに、私必ずあのインスタグラムのハッシュタグで先にどんな場所かを調べて行くんです。

多分長野県内にもいい観光地とかいろいろあると思うんですけど、多分私でも知らないところが多かったりとか、あと名前は聞くのにSNSではなんかいい感じの写真があがってなかったりとか、ちょっともったいないなっていうところもあるので、長野県自体を盛り上げられるっていうのもあるし、あとは学生の方たちが、すごい青春しているシーンとかを自分が映らなくてもうまくPRができるようになると思うので、SNSのコツをつかむっていうことを高校生のうちにやっておいた方がいいのかなと思いました。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。今のSNSの話で、これ先ほど堀井様からデータサイエンスとか外国語の話が出ましたが、それと同じ時代に即した内容のご提案等ですね。イメージとする

と、既存の職業系高校の枠組みでいうと、例えば商業系で言ったらマーケティングのような部分だとか、そういうところにも繋がってくるかと思えますし、現在の情報はどちらかというデータサイエンスとかプログラミングとかそちらの方の重点が今強くなってきているので、今のような情報をどうやってツール、SNSでそういったものをツールとして活用していくのかっていうのを、これを教科になるのか、いやそれともそういった今のように学期で1回なんてありましたけども、こういったちょっと特別的な内容としてやるのかとか、検討していく余地はあるのかなってというのは今お話を聞いていて思ったところでございます。ありがとうございます。

関係したところも結構ですしいかがでしょうか。では石坂様。

【石坂構成員】

職業系高校について、うちの子が今工業高校の1年生なんですけれど、前もお話した発達障がいがある子で、工業高校の電気電子科に行ってすごく生き生き勉強をしています。そういう特化したところに進学できたっていうのはとても恵まれていたと思います。

子供の数が減っている中で仕方ないと思うんですけど、職業系高校って、定員割れしてるところも結構あって、とてももったいないと思うんですよ。うち一番下の子が中1なんですけど、今の中1の子に、高校どうするの？って言っても、え、わかんないみたいな感じなんですよね。それが普通科じゃなくて職業科ってなると、もっとわかんない、子供たちは。よっぽどのことがなければ、工業科を選ぶかっていう。あと商業とか農業とか。何か大きな思いとかきっかけがないと選びにくい学校ではあると思うんですよ。なので、前松本工業の子たちが発表してくれた、ああいうのを中学1年生ぐらいの子たちにどんどん見せてあげたいと思います。商業科、工業科、農業科がこういうことをしてますよっていうのが、もっと多くの子供たちに見えるようにすれば、もっとこう、盛り上がっていくんじゃないかなっていうふうには思います。

【村松座長】

はい、ありがとうございます。

今、石坂様にご提案いただいた、従来も、多分高校ですと、高校見学だとか、それとか文化祭等いろんな形で一定取り組まれてはいたと思うんですけど、またさらにそういうものをより良い、中学生に届くような工夫ですね、先ほどのSNSの話じゃないですけども、こういった、従来の学科の方向性だけでなく、その取組内容も含めてこういったブラッシュアップっていうんですかね、時代に合わせた対応改善というものをやっぱり一定必要になってきているのかなと、今お話を聞いて感じたところであります。ありがとうございます。そのほかどうでしょうか。

【安原構成員】

いま石坂さんがおっしゃったものと本当に同じ事例の子を私も見てきました。アスペルガーと診断されて、でも工業系に入って今、トヨタ系の会社でバリバリやっています。そういう子供の可

能性を引き出すのが工業科にはあると思います。ただ、存続の危機があるのも確かだと思うんですね。

資料では高専についてということで、まずそれについても話したいと思うんですが、また高専をもう一つ作ってもいいんじゃないかというのにも賛成です。私の塾の卒業生で高専に行った子に聞くと、やはり非常に充実している。ここに書いてあるとおり就職率が100%、大学にももちろん進学も可能だし、就職活動するとき一人に対して何社からも求人が来るというような状況、これも魅力だと思います。だから、特に、例えば諏訪のあたりに作って、エプソンと連携でもさせてもらって、本当に専門家を育てるのも一つ大事だと思いますし、でも一方で、どうも高専というのはやはり偏差値が高い。メカに興味がありロボットを作りたいけど、そこまで勉強好きじゃないという子もたくさんいるのは確かです。そういう子たちが、やっぱり工業系の学校に行くのも確かだと思いますので、高専を作ってですね、両方を存続させるのは難しいと思いますが、今産業界の要請に応えるためにも、一つはやはり高専というのを考えると、いいかなと思います。高専は60点で赤点と聞いてます。相当勉強が大変みたいなので、あまり勉強好きじゃない子は、工業系のところで、それもちやんと就職はあるはずですから、両方考えられたらなと思います。

【村松座長】

ありがとうございました、今高専のお話もいただきました。私も高専、ロボットコンテスト等の関係で関わっております。高専機構、53ですかね、全国にあり、最近有名になった神山まると高専のような事例もございますけども、長野の場合は本当に長野高専さん、この近隣でも非常に力のある子たちが入っているようなところでございます。

それと今お話いただいた工業系の高校って、やっぱり若干方向は近いんですけどもこの生徒さんの層も少し異なったりしてるので、なかなか同立が難しいかと思えますし、やっぱそれぞれに充実させていく必要があるかと思いました。

またその高専を作った後、これも大変なハードルが、やっぱりお金の面含めてあると思いますので、その辺も含めて、本当にまると高専さんのような、もう企業が全面バックアップみたいな形でスタートできたりすると、またそれは違うのかもしれないですけども、今課題はいくつかやっぱりあるかなっていうのは感じるところでございます。

【岩本構成員】

いま高専の話でしたけど、高専は本当に産業界からも人気があって、非常に求められている。人材の輩出というところにおいても、倍率見ても、人気のあるいわゆる魅力がある学校種だと思えます。これを県立でという発想自体を私はすごいなと。よく長野県さんこういう発想ができるなと思います。

これを県の南部の方にといいようなところなんか、確かにあるのではないかと思いますし、もしやるのであれば先ほど座長言われたとおり、県の産業界と一緒にってこういってものを作っていくとか、やっていくといふのはあるのではないかと思います。

あともう一つの要素として、この資料に出てましたけど、情報デジタル系の学科っていうのが県内にはまだないといふような話があります。高専も中身いろいろあるかと思いますが、その中の一つの選択肢として、やっぱこれから情報デジタル系っていふような、産業的にもものすごい伸びますし、そういった中身の充実した高専だとかです。ね学科なんかは研究検討されてもいいのではないかなといふふうに思います。以上です。

【村松座長】

はい、ありがとうございます。高専について更に検討してもいいんじゃないかということ、それから後半いただいたのが情報関係の学科について。これも新たな学科の話にもちょっと関わってくるところでございます。残された時間も考慮しまして、ちょっとこの新たな学科の話も含めてちょっと話を広めさせていただければと思います。

資料でいうと6ページですかね。こちらの方に例示ということで、いま岩本様からお話いただきましたデジタル系学科の状況、それから例示2としまして、福祉に関する学科についての状況が、それぞれについて、デジタル系ですと教員の確保ですね、大学でも今、情報系の学部が、このところ急速に増えたってことありまして、あの最初の話じゃないですけど教員の取り合いになってるような感じで、なかなか先生が集まらないなんていう状況があるのがこのデジタル系。それだけやはりニーズとしては非常に高いところでございます。

福祉に関する学科の課題のところでは、やっぱりこの単位の問題ですね。教育課程でどうやって作れるのか、それから上級学校とか専門学校に引き継ぐことができないといふ制度的な問題等ですね、こういったいくつかの課題もあるところでございます。この辺の今の職業科高校からこの新しい学科の話まで含めまして、もしご意見等ありましたらぜひお願いできればと思いますが、いかがでしょうか。

【堀井構成員】

もし私がもう1個学校を作るんだしたら、高専を考えるとっております。

さっき、岩本さんもおっしゃってましたように、そして今回デジタルの話あったんですけど、デジタル系について、やっぱりアメリカでもコンピュータサイエンス、もう必修科目のように、それがないとアメリカで就職できないぐらいのものでもあるんですね。それを、県立高校全般的に全部やるっていうのは、ちょっと違うのかなとは思いますが、一方で、コンピュータサイエンスって深く学ぶ、要するに、皆さんご存知のプログラミングと言われるものとその言語と言われるものですね、そういったものを学ぶレベル、アカデミックに学ぶレベルと、もうちょっと実践的に、今、コーディングなしでできるプログラミングも、もうどんどん進化して開発されて、実際それができるような状況にもなっているんで、よく見ることだなとまずは思っております。

す。デジタル系であるんだったら、高専も視野に入れながら、デジタル系の学校を作ることは、やはり今先生おっしゃったように、非常にニーズがある。そこにやっぱり企業も絡める高校であるならば、情報の先生、多分特別免許とか出せると思うんですよ。そうすると、先ほど情報の先生の不足というお話もあったと思うんですけども、それにいろんなものを取り入れるんですね。公設民営なのかっていうものも含めて、デジタル系のアカデミックも実践もできるフラッグシップのような学校が学科としてある、もしかしたら高専かもしれない。

そして、加えて、世の中ではそのフラッグシップを見ながらあるいは研究校を見ながら、どんどん世の中の県立高校で、デジタルの実践の方、アカデミックではなくてもより使える、先ほど赤荻さんおっしゃったようにSNSっていうのもどうやって物を自分で作ってそれをどう発信するかってすごく大事で、もうそしたらWebマーケティングの話とかにも繋がるので、そうするとですね、今の話って、産業界で最も重要、最もはちょっと言い過ぎですねごめんなさい、失礼しました。だけど、やはりどの企業でも人も欲しいし、自分たちもやらなきゃいけないという課題意識のある、要するにマーケットで、良くないかもしれないが戦っていくためには必須なスキルであったりするので、ということを全般的にマッピングしながら、一つはデジタル化みたいな学科みたいなものを作る、もう一つには、全体的にそれが使えるようなもうちょっとハードルの低いものを使う、そしてSNSみたいな繋がりを持てるとですね、先ほどSNSの話ありましたけど、どなたかちょっとお話されたと思うんですが、中学生にそれを見せようと思ったときに、中学校もやっぱり少しずつSNS見えるようになってきたときに、その高校生がそれをやってるのっていうのを一番早くつかむのはやっぱり中学生だと思うんですよ。横の繋がりといいますか、同じ世代のものを見る人って多いんですよ。なのでそれがどんどんポジティブに、もちろん情報リテラシーということも問題はあると思います。それは我々の、ある意味責任として頑張っただけで伝えていくことも必要だと思いますけれども、その先進的なものに関してはむしろ、彼らの世代に任せるようなそんな形でやるというといいのかなっていうふうに思いました。

もう1個は、その福祉に関することなんですけど、これはその地域の方や産業界の方がどうしても必要な人材だっているのはすごくよくわかります。私も本当にそう思います。

ですが、私神奈川県で福祉といいますか保育なんですけど、大学で学科を設置しているのですが、毎年希望者が減るんです。世の中は喉から手が出るほど欲しい人材なのに、募集に関して言いますと希望者のパイが小さくなってんじゃないかと思うんです。

それが長野県にとってはどうなのかちょっとわからないんですけど、私神奈川県で毎年希望者数っていうのを全部計算したんですけども、本当にどんどん少なくなって、自分の大学の学科の存続っていうことももちろん経営上考えますから、もちろんすごく需要はあるんですけども供給サイドについてどうアプローチしていくのかっていうことも考えながらじゃないと、本当に希望する生徒さんがいるのかっていうことをちょっと確認しながらなのかなというふうに思いました。ありがとうございました。

はい、ありがとうございました。提案いただきましたデジタル系のお話については本当に民間とも協力しながらですね、教育特区的なですね、そういう形もできるかと思ひますし、結構この辺はもしかしたら思い切った展開ができるのかなと今のお話を聞いて思ひました。

また後半でいただきました福祉系の話ですね、知事の方からも産業界の声とありますが、おそらく今の福祉の話もその一つかと思ひます。非常に需要はあるんだけど、でも肝心の中学生のその進学についての希望が非常に厳しいっていういわゆるちょっとミスマッチが生じているっていう部分ですね、この辺もなかなか考えなくちゃいけないところであります。だから、出口に需要があるからといってそこにそのまますぐ作ればいいのかっていうのは、様々な角度から多面的に検討していく必要があるのかなと今のお話を聞いて感じたところであります。ありがとうございました。

その他も残すところ少なくなつてまいりましたが、いかがでしょうか。はい。安原さんお願いします。どうぞ。

【安原構成員】

堀井さんが言われたように福祉は人気がないというのはそう感じます。実はたまたま私の妻が福祉関係の会社で事務をやってまして、話を聞きますと、本当に喉から手が出るほど欲しいけどその人材がない。

福祉系の高校に行くと介護福祉士という免許が取れるらしいんですね。ヘルパーの免許はそんなに難しくないけど、介護福祉士の免許は難しい。その免許を持たずに就職した人がほとんどらしいんですね。だけど、働きながら介護福祉士の免許を取ろうと思うともものすごく大変で、だからみんな諦めてるという。

業界はかなり逼迫した形であるので、どうやって福祉科に人を呼ぶのかはすごく難しいと思ひますが、そこに例えばビジネス、福祉を例えばどうやってビジネスに結びつけるか、明らかにこれから一つの巨大ビジネスになると思ひます、福祉関係は。例えばそういう切り口とか、ただただ社会福祉の一つの駒としてじゃなくて、生きていく上で、福祉をどう活用するかというようなことも含めた学科にするとか、何かいろいろアイデアはあると思ひます。福祉系は大事です。とにかく、これだけは伝えておくと妻に言われてきました。

【村松座長】

ありがとうございました。多分その必要性については皆さん同意するところかと思ひます。

先ほどの情報の話でもありまして、あと冒頭の方で、学校でやれることの限界みたいなところがあつたかと思ひます。他県ですかね、このあいだお話聞いて私非常にうまく回してるなと思つた大分県さんの例でしたかね。そこではまさに探究みたいなことやってるんですけども、学校の教育の予算だけではなくて、例えば産業界の農業系の予算で「農業×〇〇」とか、そういう形でその教育以外のそういった予算とかもうまく活用しながら、非常に大規模な展開をされておりました。

そうやってきたときに、知事の方でも、県の中のいろんな部局の垣根を越えてっていうお話もありましたけども、学校だけでやれることやれないことがあって、それ超えていくようなためにも、こういった産業界も巻き込んで、柔軟ないろんな事業予算の活用や、そういうものを取りわけ今の福祉の関係も、福祉の学科を作って何とかっていうだけでは多分きっと難しいところがありますので、今のビジネス化するっていうのであれば、そんな事業なんかとも連携して、少し従来の学校教育を超えたようなアイデアとか発想が、うまく入るとちょっと展開が変わってくるのかなっていうのは、感じたところであります。ありがとうございました。

最後にご意見あればおひと方いかがでしょうか。

ありがとうございました。

今日も本当に様々な多様なテーマにつきまして、それぞれのお立場からご意見いただきありがとうございました。

大きく話を見てまいりますと、最初の方でありました学校でやれることの限界と可能性っていうところがいろんな点から出てきたかと思うんですけども、途中で小木曾様からもいただいた色と形っていうんですかね、言い方変えると仕組みとその中の内容のお話かと思うんですけども、その仕組みについても様々な議論いただきました。

公立と私立の連携や、自治体との連携、企業と連携、そこに自治体と学校とのコミュニケーションが非常に重要であると。普通科含めデュアルシステムの活用や、国際バカロレアとかについても公設民営のような仕組みのお話もいただきました。

また県立の高専につきましても、ご議論いただきました。

そして中高連携ですね。これも併設型だけでもそれを研究していくといいんではないかっていうような一方ですね、連携型だとかいろんな可能性を検討していつてはどうかというようなこと、そしてその魅力をどのように広げていくのかっていうお話でした。

その他の教育の内容についてもですね、本当に地域に根ざした特色という話、それから国際的な視点に立っての様々な取り組みですね。外国籍教員の話もありましたし、こういった外国籍の生徒さんたちにどのように対応していくのか、一方で今の生徒たちをどうやって外に目を向けさせていくのかという話。またSNSとかデータ系って言われるような新しい時代に即した内容、こういうものをどういうように対応させていくのか考えていくのか、そして職業系高校のところでも時代に合った内容ですね、こういったものがいろいろ議論されました。

やっぱそれを進めていくにもやはり産業界、地域、県民のみなさんたちの声をいろいろ聞きながらですね、当然、人お金のかかるところでございますので、そこ辺も踏まえましてですね、ぜひ学校の枠を超えて、大きな視点から連携の枠組みとかそういった議論というのを今後進めていく必要があるなということを感じた次第であります。

長時間にわたるご議論ありがとうございました。またこちらの進行も十分でなく最後十分深めきれなかったところを拾いきれなかった部分があったのかもしれませんが。ご容赦ください。

それでは時間となってまいりましたので、最後もし知事の方からも一言あればお願いできればと思いますが、よろしく願いいたします。

【阿部知事】

はい、まず村松座長はじめ、皆様には大変長時間にわたって、かつ大変幅広い分野についてのご意見をいただきましてありがとうございました。

私はオブザーバーなんで私がまとめるのはどうかなっていう気もしますけれども、私の申し上げるべきことはだいぶ途中でお話いたしました。最後の高専の話はかなり多くの皆さんが方向感共有されてる感じでしたし、あとデジタルですね、SNSの活用といったようなことも含めて、これやっぱ本当に私達の世代の発想でやってると多分間違えるなというふうに思ってます。そういう意味ではまさに若い世代の人たちと一緒に、特にデジタルをはじめとする学びのあり方ってというのは、考えていかなければいけないっていうふうに、改めて感じたところであります。

先ほど申し上げたようにこれ、非常にですね、教育のところは誰が責任持つてるかよくわからないのがいつも私も多くの保護者の方たちも悶々としてるところでありまして、やっぱ校長の権限は何、教育委員会の権限は何、知事の権限は何。予算等必要として県議会の皆さんと議論するのは何ってというのが、多分ちょっと今日の話も多分いろんなレベルの話が混ざってるというふうに思ってます。

ちょっとそこは少し事務方等を含めては私も交通整理をしなければいけないなというふうに思いますけれども、多分そこがないと何となく聞きっぱなしで結局誰がこれを受けてるのか、私が受けるのか教育委員会が受けるのか、校長先生が受けるのか、よくわかんなくなってしまう。せっかくいろいろいただいたご意見がどっかに消えてしまうという話になりかねないんで、そうならないようにしたいと思います。

これまとめるんだよね。議論のまとめはしないけど、こんな意見があったからこんな方向で検討しますってというのは、まとめるってことでいいんですよ。

冒頭座長がおっしゃったのに若干気になっていて、何となく聞きっぱなしで終わりますっていう話になってしまうといけないんで、何ていうか、バラバラな意見があるけど概ねこんなことが主張されていますよねと、まず県としてもこんなことを検討していきますという結論は出ないにしても何となくそういうことをまとめていただく必要があると思ってもいいですよ、そういうことで。というふうにしていかないといけないと思ってます。

またそういう意味では、また次回も皆さんからご意見いただきたいと思えますし、ちょっと我々もいただいたご意見、一定程度整理をして具体的なアクション起こす主体が私だったり教育委員会だったり、学校長の皆さんであったりいろんなレベルがあるんで、それらもちょっと交通整理しながらいただいた意見を具現化できるように取り組んでいきたいというふうに思います。本日も大変長時間ありがとうございました。よろしくお願ひします。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。

いよいよ次回が最後の会になります。いま阿部知事からもいただいたようにここまでの意見を集約しながら今後の見通しが立つような形でまとめていければと思います。ありがとうございました。

では以上をもちまして本日の会議事項を終了とさせていただきたいと思います。これで事務局に進行をお返しいたします。

【事務局：今井高校改革推進役】

それでは事務局から2点連絡です。

次回の日程でございますけれども、次回が最終回ということで、令和6年3月15日に開催予定でございます。よろしくお願いいたします。

また本日の議事録につきましては冒頭申し上げました通り、県のホームページに公表する予定でございます。皆様には、事前に掲載内容のご確認をお願いしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

本当に長時間にわたって熱心なご議論ありがとうございました。以上をもちまして、本日の懇談会を終了いたします。

ありがとうございました。